

社説

<2015.8.30>

不登校増加 子ども目線で見守りを

文部科学省の学校基本調査（速報値）で、2014年度に病気や経済的理由以外で年間30日以上欠席した「不登校」の小中学生は12万2902人と2年連続で増加した。小学生は2万5866人で、全児童に占める割合が0.39%と過去最高だった。静岡県内も前年度を上回る4074人で全国と同様の傾向だった。

夏休み明けは不登校になる児童、生徒が増えるという。学校や家庭は子どもと目線で接し、個々に見合った対応を心掛けた。

学校現場では不登校にどう対応するか、模索が続く。基本は子どもと向き合い、魅力的な学校をつくることだ。いじめなどが起きにくく、子どもと教員がともに活力ある学校を目指してほしい。教員が目の子どもの

一人一人に十分な目配りができるよう、業務の精選や人的手当てを進めべきだ。学校全体が窮屈な雰囲気になつていないか、確認したい。

不登校につながる子どもの変化の早期把握と適切な対応という点で、「保健室の先生」とも称される養護教諭の存在は大きい。県内の大学でも高い専門性を持つ養護教諭の1種免許を取得できる課程が増えつつある。各校1人であることが多い養護教諭が、校外研修に出やすい体制づくりなどを進めてほしい。

県教委は不登校の予防策として、人間関係づくりの基本能力を子どもたちに身につけてもらうプログラムを改訂し、本年度から各校に実践を呼び掛けている。プログラムは学年ごと、自分を表現し、自分の気持ちに対処する力を伸ばすための具体的な授業例などを示している。こうした子ども自身の対応力を高める取り組みも重要だろう。家庭では、子どもの行動や身振りの変化、体調などに気をつけ、話にじっくり耳を傾けたい。インターネットへの依存などで生活が不規則にならないよう、親子で話し合っ規則をつくるのが大切だ。家族のコミュニケーションづくりを心掛け、気掛かりな状況については、気兼ねなく学級担任などとよく話し合っ対応を考えたい。

子どもを無理に登校させず、フリースクールに通わせるなど学びの場の選択肢は広がりにある。フリースクールを公的支援するための法整備の動きもあり、スタッフの資質向上などについて、これまで以上に社会的責任を自覚しての努力が求められる。

不登校の背景は、学校や家庭での状況、本人の心身の状態など多様だ。それだけに、子どもに関わる多くの大人が連携し、長い目で見守っていかねばならない。

2015年8月30日
朝刊

①不登校に対応するため、学校がすべきことを書きましょう。

②不登校に対応するために、家庭がすべきことを書きましょう。

年 組 名前

(教員・保護者)